

サイバー空間・フィジカル空間に形成される人々の「居場所」の様相に関する研究

- 「居場所」の特性および心理的側面に着目して -

Research on the aspect of people's "Ibasho" in cyberspace and physical space

- Focusing on the characteristics and psychological aspects of "Ibasho" -

鈴木茜*・矢吹剣一**・後藤智香子**・新雄太***・吉村有司**・小泉秀樹***
Akane Suzuki, Kenichi Yabuki, Chikako Goto, Yuta Shin, Yuji Yoshimura and Hideki Koizumi

Nowadays, people's "Ibasho" exist not only in physical space but also in cyberspace, but it is not clear what kind of "Ibasho" people have, including in cyberspace. The purpose of this study is to clarify the aspect of people's "Ibasho" formed in cyberspace and physical space especially focusing on the characteristics and the psychological aspect of "Ibasho". This study found that the psychological function of "Ibasho" differs depending on the type of "Ibasho" classified into four categories: cyberspace / physical space, personal / social, and what kind of place it is. In addition, based on the results, this study proposes eight points that make a difference between the "Ibasho" in cyberspace and physical space.

Keywords: Ibasho, place, third place, cyberspace, physical space, psychological aspects

居場所, 場所, サードプレイス, サイバー空間, フィジカル空間, 心理的側面

1. はじめに

1.1. 研究の背景と目的

社会的孤立の拡大といった課題に対して居場所やサードプレイスの重要性が指摘されてきた¹⁾。近年はオンライン化やデジタル化が加速し、サイバー空間とフィジカル空間が重なり合い、相互補完的に共存するような社会で人々の生活が営まれているといえ²⁾、それに伴い、人々の居場所やサードプレイスも、サイバー空間へと拡張している。そうした中で、人々の居場所をサイバー空間も含めて捉える必要があると考える。

居場所に関する研究は、心理・教育分野で、居場所感の構成要素³⁾や居場所の心理的機能⁴⁾など、居場所が持つ心理的側面に関する研究の蓄積が豊富である。都市・建築分野では、主にまちの中で人々に利用される場所に関する研究が行われており、その実態や特徴⁵⁾、居場所となるための要件⁶⁾などについての研究がある。これらの研究で扱われる居場所やサードプレイスにも心理的意味合いが含まれると考えられるが、心理的側面を含めた研究は川村ら(2013)⁷⁾以外にみられない。

また、バーチャルコミュニティ等のサイバー空間上での人とのつながりや場が、居場所やサードプレイスとなりうることを指摘した研究もいくつかみられるが⁸⁾¹⁰⁾¹¹⁾、対象が限定的である。また、近年のバーチャルコミュニティはリアルな社会と密接な関わりを持つことが指摘されているが¹²⁾、居場所についてサイバー空間とフィジカル空間を同時に扱った研究は少なく、その全体的な様相は把握されていない。

よって本研究では、サイバー空間およびフィジカル空間に形成される人々の「居場所」の様相を、①「居場所」の心理的側面、②生活の中での「居場所」のあり方、の2つの

視点から明らかにすることを目的とする。

本研究の新規性は、サイバー空間・フィジカル空間の「居場所」を同時に扱い、心理的側面および双方の空間性比較、両者の関係性に着目した分析を行う点にある。

1.2. 本研究で扱う「居場所」の定義

先行研究において、居場所の統一的な定義はないが、居場所は心理的側面を含むものであり、そこでの他者との関係性によって個人的居場所と社会的居場所に分類できるという点は、一定の共通性があるといえる¹³⁾。

先行研究¹¹⁾⁴⁾¹⁶⁾から、居場所で共通して得られる感情・認知として、居心地の良さ・安心感・満足感が挙げられる。本研究でもこれらを居場所の基本的要件とみなし、「居場所」を「居心地がよく、安心感や満足感を得られる場」と定義する。

また、居場所は、具体的・物理的空間ないしは場所の形態を取ることもあれば、他者との関係性の中に見出されることもあるが¹⁴⁾、本研究では空間性の違いに着目するため、住田ら(2003)¹⁵⁾に倣い、[関係性—空間性]という一体化された形で捉える。

また、関係性軸では他者との双方向の会話の有無によって個人的「居場所」と社会的「居場所」に、空間性軸ではサイバー空間とフィジカル空間に分類することで、4つの「居場所」タイプ ([Cy-個],[Cy-社],[Phy-個],[Phy-社]) を設定し分析を進める (図-1)。

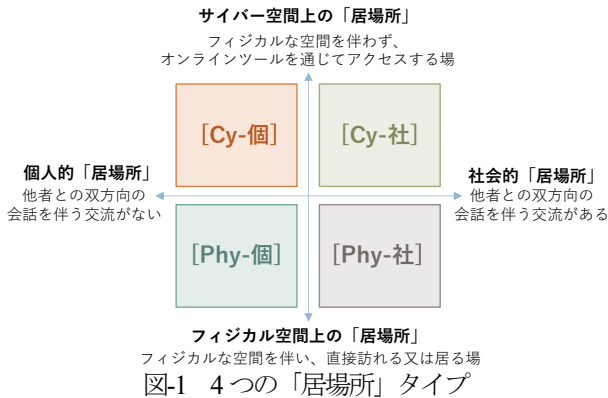
1.3. 研究手法と論文の構成

本研究では、人々の「居場所」の様相を把握するため、アンケート調査による全体的な傾向の把握および、インタビュー調査によるケーススタディを実施した。調査の詳細はそれぞれ2章、4章で記す。2,3章では、ウェブアンケート

*正会員 大成建設株式会社 (TAISEI CORPORATION)

**正会員 東京大学先端科学技術研究センター (Research Center for Advanced Science and Technology, The University of Tokyo)

***正会員 東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻 (Dept. of Urban Eng., Faculty of Eng., The University of Tokyo)



調査の結果から人々がサイバー空間/フィジカル空間に形成する「居場所」について、全体的な傾向を把握する。4章では、インタビュー調査の結果に基づくケーススタディを通じて、「居場所」のあり方や心理的な機能を持つ「居場所」となる要素を分析・考察する。最後に5章で結びとする。

2. 人々が持つ「居場所」の全体像

2.1. アンケート調査の概要

調査会社を通じ、東京都23区内在住の20~60代の男女を対象に2021年10月4~6日にWeb調査を実施した。総務省の調査では、60代でもインターネットの利用率は90%を超えており¹⁷⁾、さらに主なソーシャルメディアとして用いられている「LINE」の利用率も76.2%である¹⁸⁾ことから、サイバー空間/フィジカル空間双方に「居場所」を形成しうる世代として20~60代を調査対象に設定した。また、フィジカル空間の「居場所」となりうる場所の地域差を考慮し、居住地域を絞って調査を行った。

アンケート調査の設問は表-1の通りである。調査では、まず「居心地がよく、安心感や満足感を得られる『居場所』の有無を尋ねた。ここでは1.2.で定義した「居場所」の定義を質問文に入れることで、本研究で定義した「居場所」の存在の有無に関して回答を得られるようにした。また、居場所という言葉の一般的なイメージから、物理的な空間に関する回答に偏ることが考えられるため、本調査における「居場所」には物理的な空間だけでなく、オンライン上の

表-1 アンケート調査項目の概要

属性	性別、年代、職業、居住地(23区)、勤務地・通学地(市町村まで)、現在の同居者
生活行動	外出頻度(通勤・通学目的/通勤・通学目的以外)、外出時の移動手段(通勤・通学目的/通勤・通学目的以外)、インターネットを利用する端末、オンラインツールの利用頻度(LINE、Twitter、Instagram、Facebook、その他のSNS、その他のオンラインチャット、ブログ、情報・レビュー共有サイト、掲示板、メーリングリスト、オンラインゲーム/ソーシャルゲーム、動画共有サイト)、生活満足度
「居場所」の保持	「居心地がよく、安心感や満足感を得られる居場所」の数
	特に重要だと思う「居場所」を最大5つ挙げ、以下について回答
「居場所」の実態	人数、他者との関係(自)、他者との交流の有無、空間・場の用途(自)、主な活動(自)、利用頻度、利用意向、匿名性、他者との関係の起源と発展、他に利用する空間・場(自)
「居場所」の評価	居場所から得られる感情・認知(35項目) 空間・場の状態(11項目)

(自)は自由記述の設問

場やつながりも含むことを明記し、例として、「高校の同級生とのLINEグループ、Twitterの趣味アカウント、近所の図書館、習い事の〇〇教室など」と記載することで、本研究で扱うサイバー空間・フィジカル空間を含めた「居場所」の回答を得られるようにした。

上記の設問で「居場所」が有と回答した人へのみその後の調査へ進んでもらい、属性や生活行動のほか、最大5つの「居場所」について詳しく尋ねた。さらに自由記述欄を設け、主に①他者との関係性(共通)、②空間・場所の用途(フィジカル空間)、③ツール・アプリ名(サイバー空間)、④主な活動(共通)を聞き、各「居場所」のタイプや用途を把握した。

回収は性別・年代で均一に行い、全体で500サンプルを集めた。そのうち、「居場所」タイプが半判断可能なもののみを有効回答として抽出し、433名、932の「居場所」を分析対象とした。

2.2. タイプごとの「居場所」の様相

「居場所」タイプごとの回答数をみると、フィジカル空間上の「居場所」は、約6割の人が保持していた。一方、サイバー空間上の「居場所」について、[Cy-社]は約25%が保持しているものの、[Cy-個]は約6%しか保持していなかった。また、全体の「居場所」の回答数のうち、約8割をフィジカル空間上の「居場所」が占めた(表-2)。

表-2 タイプごとの回答数

タイプ	保持している人数	保持している割合(%)	「居場所」の回答数	各タイプの割合(%)
[Cy-個]	27	6.2%	30	3.2%
[Cy-社]	108	24.9%	149	16.0%
[Phy-個]	252	58.2%	379	40.7%
[Phy-社]	262	60.5%	374	40.1%
合計	433	100.0%	932	100.0%

タイプごとの「居場所」の特徴について、自由記述回答をもとに空間・場ごとに回答が一定数みられたもの(サイバー空間はN≥4、フィジカル空間はN≥8)をみると、空間・場によって、個人的「居場所」として用いられやすいものと、社会的「居場所」として用いられやすいものがあるといえる(表-3)。

サイバー空間では、遠くの誰かと繋がるようなツール(Twitter、YouTube等)が前者に、身近な人と繋がるようなツール(LINE、Zoom等のテレビ会議等)が後者になる傾向があると考えられる。一方フィジカル空間では、パーソナルスペースを確保できる空間・場(自宅・自室等)や、大衆の中で匿名的に居られるような空間・場(公園・オープンスペース等)が個人的「居場所」に、社会的関係と強く結びついている空間・場(自宅・自室等、職場、趣味・サークルの場等)が社会的「居場所」になる傾向があると考えられる。

2.3. 「居場所」の心理的側面

2.3.1. 尺度項目について

4タイプに分類した「居場所」の心理的側面を捉えるため、本研究では、西中(2014)¹⁶⁾の居場所感の構成要素の分類を参

照しつつ、その他の先行研究⁹⁾¹⁹⁾²⁰⁾および予備調査の結果²⁾を参照して「居場所」で得られる感情・認知の尺度項目を定めた。具体的には、先行研究にある項目から、本研究で定義した「居場所」の前提となる居心地の良さや安心感、満足感を直接的に問うもの、特定の対象を想定したもの、居場所で得られる感情・認知ではないもの、その他表現が曖昧なものや他の項目に包含されるものを除外し、類似した内容の項目をまとめた。さらに、予備調査の回答を踏まえ、類似の記述のあるものから優先順位をつけて選定する

表-3 空間・場ごとの「居場所」および因子得点

タイプ	空間・場	N	心理的側面 (因子得点の平均値)						
			受容機能	自由・緊張緩和機能	刺激・活力機能	自己肯定機能	自己肯定機能		
			凡例	○	○	○	●	●	●
			0.6以上	0.4以上	0.2以上	-0.2以下	-0.4以下	-0.6以下	
[Cy-個]	Twitter*	6	●	○	○	○	○	○	
	Instagram	5	○	○	○	○	○	○	
	YouTube	4	○	○	○	○	○	○	
[Cy-社]	Twitter*	8	●	○	○	○	○	○	
	LINE	114	○	○	○	○	○	○	
	Zoom等のテレビ会議	9	○	○	○	○	○	○	
	Facebook	5	○	○	○	○	○	○	
	メール	4	○	○	○	○	○	○	
[Phy-個]	自宅・自室等*	195	●	○	○	○	○	○	
	カフェ・飲食店*	25	●	○	○	○	○	○	
	まち・旅先*	9	●	○	○	○	○	○	
	公園・オープンスペース	30	○	○	○	○	○	○	
	図書館	26	○	○	○	○	○	○	
	商業施設 (小売店)	18	○	○	○	○	○	○	
	車	9	○	○	○	○	○	○	
	映画館・劇場・ライブハウス等	8	○	○	○	○	○	○	
[Phy-社]	自宅・自室等*	181	○	○	○	○	○	○	
	カフェ・飲食店*	30	○	○	○	○	○	○	
	まち・旅先*	8	○	○	○	○	○	○	
	実家・別荘	38	○	○	○	○	○	○	
	職場 (オフィス・会議室等)	26	○	○	○	○	○	○	
	趣味・サークルの場	18	○	○	○	○	○	○	
	友人・知人・恋人の家	21	○	○	○	○	○	○	

ことで、先行研究から得られた項目から 32 の尺度項目を設定した。また、予備調査で新たに得られた 3 項目³⁾を加え、計 35 項目の「居場所」で得られる認知・感情について 5 件法で尋ねた。

表-4 因子分析結果

項目	因子負荷量			
	受容 α=0.968	自由・緊張緩和 α=0.931	刺激・活力 α=0.771	自己肯定 α=0.794
そこでは自分のことを気にかけてもらえている	0.963	0.003	-0.001	-0.121
そこでは悩みや相談を聞いてもらえる	0.947	0.109	-0.186	-0.122
そこでは何でも気軽に話せる	0.930	0.125	-0.100	-0.136
そこでは誰かと繋がっていると感じる	0.911	-0.082	0.045	-0.105
そこでは協力して何かに取り組んだり助け合うことができる	0.900	-0.067	-0.042	-0.002
そこにいる人は仲間だと感じる	0.859	-0.096	0.078	-0.039
そこでは価値観や考えを共有でき、分かり合える	0.854	0.004	0.049	-0.035
そこでは自分の存在が認められている	0.717	-0.010	0.041	0.210
そこでは自分が必要とされている	0.703	0.016	0.175	-0.052
そこでは自分のことを理解してもらえている	0.692	-0.043	-0.075	0.325
そこでは自分のすることを認めてもらえたり評価してもらえたりする	0.681	-0.135	0.119	0.239
自分はそこに所属するメンバーだと感じる	0.679	-0.019	-0.080	0.327
そこでは自分が必要とされている	0.661	-0.082	0.001	0.322
そこでは自分が受け入れられている	0.521	0.097	0.149	0.163
そこでは周りの人を気にしなくて良い	0.019	0.877	-0.196	-0.008
そこでは気を使わなくて良い	0.020	0.846	-0.076	-0.094
そこでは人に邪魔されずのびのびといられる	-0.089	0.826	0.005	-0.019
理由がなくても気軽にいられる	0.033	0.823	-0.048	-0.056
そこでは気持ちが落ち着き、リラックスできる	0.033	0.757	0.097	-0.087
そこでは気持ちが楽である	0.030	0.754	0.188	-0.220
そこでは自分の好きなことややりたいことを好きなようにできる	-0.091	0.706	0.030	0.093
そこではありのままの自分でいられる	0.109	0.690	-0.031	0.120
そこでは物思いにふけることができる	-0.202	0.654	-0.167	0.233
そこでは周りから干渉されすぎず程よい距離感でいられる	-0.109	0.633	0.175	-0.054
そこでは自分自身のことを考えることができる	0.067	0.628	-0.106	0.240
自分や自分たちだけの場であると感じる	0.220	0.453	-0.244	0.424
ここでなければならぬという感じがする	0.211	0.331	0.162	0.199
そこでは何かに熱中できる	-0.051	0.324	0.257	0.228
そこでは刺激や活力をもらえる	0.080	-0.053	0.773	-0.114
そこでは自分がいきいきできる	0.130	0.327	0.469	0.067
そこでは嫌なことや不安を忘れられる	0.056	0.438	0.447	-0.160
そこでは頭の切り替えができる	-0.187	0.248	0.380	0.216
そこでは自分の役割や自分にできることがある	0.251	-0.010	-0.094	0.675
そこでは自分の能力を発揮できる	0.356	-0.009	0.096	0.481
そこでは自分に自信が持てる	0.268	0.090	0.247	0.314

表-5 タイプごとの因子得点の比較

	タイプ	場	I											
			[Cy-個]		[Cy-社]		[Phy-個]				[Phy-社]			
			平均値の差 (I-J)	標準誤差	平均値の差 (I-J)	標準誤差	平均値の差 (I-J)	標準誤差	平均値の差 (I-J)	標準誤差	平均値の差 (I-J)	標準誤差	平均値の差 (I-J)	標準誤差
受容	J	[Cy-個]			1.100**	0.142	-0.127	0.149	-0.364	0.148	1.135**	0.140	0.926**	0.141
		[Cy-社]	-1.100**	0.142			-1.227**	0.085	-1.464**	0.083	0.036	0.066	-0.173	0.069
		[Phy-個] 自宅・自室等	0.127	0.149	1.227**	0.085			-0.237	0.096	1.263**	0.082	1.054**	0.084
		[Phy-個] それ以外	0.364	0.148	1.464**	0.083	0.237	0.096			1.500**	0.080	1.290**	0.082
		[Phy-社] 自宅・自室等	-1.135**	0.140	-0.036	0.066	-1.263**	0.082	-1.500**	0.080			-0.209*	0.065
自由・緊張緩和	J	[Cy-個]			0.235	0.200	0.767**	0.201	0.380	0.201	0.536	0.197	-0.047	0.201
		[Cy-社]	-0.235	0.200			0.532**	0.103	0.145	0.104	0.301*	0.094	-0.283	0.102
		[Phy-個] 自宅・自室等	-0.767**	0.201	-0.532**	0.103			-0.387**	0.105	-0.231	0.096	-0.814**	0.103
		[Phy-個] それ以外	-0.380	0.201	-0.145	0.104	0.387**	0.105			0.156	0.096	-0.427**	0.104
		[Phy-社] 自宅・自室等	-0.536	0.197	-0.301*	0.094	0.231	0.096	-0.156	0.096			-0.583**	0.095
刺激・活力	J	[Cy-個]			-0.493	0.181	-0.853**	0.186	-0.015	0.189	-0.728**	0.180	-0.086	0.184
		[Cy-社]	0.493	0.181			-0.360**	0.095	0.478**	0.100	-0.235	0.082	0.407**	0.091
		[Phy-個] 自宅・自室等	0.853**	0.186	0.360**	0.095			0.838**	0.110	0.125	0.094	0.767**	0.102
		[Phy-個] それ以外	0.015	0.189	-0.478**	0.100	-0.838**	0.110			-0.713**	0.099	-0.071	0.107
		[Phy-社] 自宅・自室等	0.728**	0.180	0.235	0.082	-0.125	0.094	0.713**	0.099			0.642**	0.091
自己肯定	J	[Cy-個]			0.366	0.235	1.192**	0.245	0.264	0.243	0.769	0.233	0.628	0.238
		[Cy-社]	-0.366	0.235			0.825**	0.101	-0.103	0.096	0.402**	0.068	0.262*	0.082
		[Phy-個] 自宅・自室等	-1.192**	0.245	-0.825**	0.101			-0.928**	0.118	-0.423**	0.097	-0.563**	0.107
		[Phy-個] それ以外	-0.264	0.243	0.103	0.096	0.928**	0.118			0.505**	0.092	0.365**	0.103
		[Phy-社] 自宅・自室等	-0.769	0.233	-0.402**	0.068	0.423**	0.097	-0.505**	0.092			-0.140	0.077

TamhaneのT2の結果 *p<.05, **p<.01

2.3.2. 「居場所」が持つ4つの心理的機能

上記で設定した項目について、「とてもよく当てはまる」～「全く当てはまらない」を5段階で点数付けし、固有値が1以上の基準を設けて因子分析（最尤法、Promax 回転）を行ったところ4因子構造を得た（表-4）。

受け入れられているといった感覚や所属意識等に関わる項目がみられた第1因子を「受容機能」、自由さや緊張からの解放に関わる項目がみられた第2因子を「自由・緊張緩和機能」、刺激や活力をもらい、いきいきできるといった項目がみられた第3因子を「刺激・活力機能」、自らを肯定的に捉えている項目がみられた第4因子を「自己肯定機能」と名付けた。

2.3.3. 「居場所」の特徴と心理的機能

因子得点を用いて分散分析（Brown-Forsythe 検定）を行った結果、全ての因子でタイプによって平均値に有意な差があり、「居場所」のタイプによる心理的機能の違いがあることがわかった。なお、フィジカル空間上の「居場所」では自宅・自室等が約半数を占めていたため、[Phy-個][Phy-社]それぞれについて、自宅・自室等とそれ以外を2分した6タイプで比較している。

タイプごとの多重比較の結果（表-5）および、空間・場ごとの因子得点の平均値（再表-3）をみると、受容機能は、他者との交流のある社会的「居場所」で高まる傾向があり、サイバー空間/フィジカル空間での差はみられない。自由・緊張緩和機能は、自宅・自室等の自分（たち）の空間を確

保できたり、公園・オープンスペース等の自然や開放感を感じられたりする「居場所」で高まる傾向があり、フィジカル空間が優位といえる。刺激・活力機能は、さまざまな物事や情報に触れたり自分の好きなことができたりする「居場所」で高まる傾向があり、空間・場の特徴や活動によって高まりやすいものがある。自己肯定機能は、場に対する自分の裁量があるような「居場所」で高まる傾向があり、フィジカル空間が優位といえる。

3. 個人属性・生活行動と「居場所」の保持

3.1. 「居場所」の保持の類型化

自宅・自室等とそれ以外の区別を含む6タイプでの「居場所」の有無（1,0）によって、階層的クラスター分析（Ward法）を行い、デンドログラムを参照して回答者を5つのクラスターに分類した。表-6は、各クラスターでタイプごとの「居場所」を保持している割合を示したものである。サイバー空間/フィジカル空間、個人的/社会的のそれぞれへの偏りがみられ、「居場所」の保持の特徴から各クラスターに名前をつけた。「居場所」の保持については、カイ2乗検定の結果、全てのタイプでクラスターによる保持に有意な差が認められた（有意水準1%）。調整済みの残差の分析により、他のクラスターよりも保持している割合が有意に高いと判断されるものは赤字、有意に低いと判断されるものは青字で示している。

3.2. 各クラスターの特徴と「居場所」

表-7に、クラスターごとの属性や生活行動の比率を示している。オンラインツールの利用頻度については、利用している割合が高く、特にクラスターによる差がみられたもののみを示している。これらを比較してみると、サイバー空間上の「居場所」を持つ「ひとりの世界に籠るタイプ」「オンラインで交流したいタイプ」では若い世代が比較的多く、またオンラインツールの利用頻度が比較的高い。特に後者のタイプでは、LINEやTwitter、Instagramなどの交流を目的としたSNSの利用が多くみられた。また、

表-6 各クラスターのタイプごとの「居場所」の保持

	ひとりの世界に籠るタイプ	オンラインで交流したいタイプ	自宅で家族と交流タイプ	外で交流したいタイプ	ひとりで外に出たいタイプ	合計
N	78	65	169	63	58	433
[Cy-個]	25 (32.1%)	2 (3.1%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	27 (6.2%)
[Cy-社]	5 (6.4%)	64 (98.5%)	39 (23.1%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	108 (24.9%)
[Phy-個]	自宅・自室等 64 (82.1%)	26 (40.0%)	26 (15.4%)	30 (47.6%)	29 (50.0%)	175 (40.4%)
	それ以外 8 (10.3%)	10 (15.4%)	32 (18.9%)	23 (36.5%)	58 (100.0%)	131 (30.3%)
[Phy-社]	自宅・自室等 7 (9.0%)	0 (0.0%)	169 (100.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	176 (40.6%)
	それ以外 0 (0.0%)	23 (35.4%)	64 (37.9%)	63 (100.0%)	0 (0.0%)	150 (34.6%)

「居場所」の保持の割合が他クラスターよりも、有意に高い（赤字）/有意に低い（青字）

表-7 各クラスターのタイプごとの「居場所」の保持

クラスター	性別	年代	同居者の有無	外出頻度						オンラインツールの利用頻度											
				通勤・通学目的			通勤・通学目的以外			LINE		Twitter		Instagram		動画共有サイト					
ひとりの世界に籠るタイプ	36	42	23	17	18	9	11	48	30	9	33	13	32	17	7	5	26	21	9	3	7
オンラインで交流したいタイプ	25	40	16	18	9	13	9	38	27	12	15	10	6	21	13	7	20	10	11	22	
自宅で家族と交流タイプ	75	94	22	25	42	36	44	161	8	16	60	24	125	7	45	19	25	56	42	19	
外で交流したいタイプ	36	27	9	13	14	12	15	30	33	7	22	13	6	21	12	8	9	25	16	32	
ひとりで外に出たいタイプ	35	23	8	8	9	20	13	34	24	12	23	11	13	8	11	5	24	12	3	12	

凡例
 ■ 男性 ■ 20代 ■ 30代 ■ 40代 ■ 同居者有 ■ ほぼ毎日 ■ 週4～5日 ■ 週2～3日
 ■ 女性 ■ 50代 ■ 60代 ■ 同居者無 ■ 週1日 ■ 月2～3日 ■ 月に1日以下
 ■ 2～3ヶ月に1程度以下 ■ 使わない
 ■ ほぼ毎日 ■ 週4～5回程度 ■ 週2～3回程度
 ■ 週1回程度 ■ 月2～3回程度 ■ 月に1回程度

フィジカル空間上の自宅・自室等以外の「居場所」を持つ「外で交流したいタイプ」「ひとりで外に出たいタイプ」では、通勤・通学目的以外の外出頻度が比較的高い。これらより、属性や生活行動によって「居場所」の保持に一定の傾向がみられることがわかった。

また、自宅・自室等の[Phy-個]の「居場所」を持つ「ひとりの世界に籠るタイプ」の人が[Cy-個]を保持している傾向がみられるなど、サイバー空間での「居場所」の保持は、フィジカル空間での生活行動とも関連がある可能性が示唆された。

4. ケーススタディにみる「居場所」のあり方

4.1. インタビュー調査の概要

ここでは、インタビュー調査の結果から、サイバー空間とフィジカル空間が併存する社会において、個人の生活の中でどのように「居場所」が形成・利用されているのか、またそれらの「居場所」における心理的機能に影響する要素について明らかにする。

インタビュー調査の概要は、表-8 の通りである。対象者は、アンケート調査回答時にインタビュー調査への参加を希望した人の中から、主にサイバー空間/フィジカル空間双方を用い、比較的多数の「居場所」を保持していた人を属性の偏りのないよう考慮して選定した。その後改めてインタビュー調査への同意が得られた 12 名に対して調査を実施した (表-9、図-2~図-5)。

4.2. 生活の中での「居場所」の形成と利用

インタビュー調査の結果を定性的コーディングにより整理し、「居場所」形成のきっかけとしては、表-10(a)のパターンがみられた。特に、インターネット経由でフィジカル

空間上の場所を知るケース (3 名該当) では、比較的多様なオンラインツールを利用しており、多様なオンラインツールの利用がフィジカル空間上の「居場所」の形成に寄与している可能性が示唆された。

また、他者との関係性のある「居場所」では、サイバー空間/フィジカル空間の双方を用いながら他者との交流をしているケースがあった (表-10(b))。それぞれの役割や使い分けとしては、表-10(b)に示す 4 つのパターンがみられた。こうした違いが生じる理由としては、アクセス性、時間・場所の共有の必要性、コミュニケーションの 3 点が考えられ、前者 2 つはフィジカル空間で特に制約が大きく、後者はサイバー空間で制約が大きいと考えられる。

さらに、時間・場所的な利用にも各空間での特徴がみられた (表-10(c))。違いが生じる理由として、アクセス性、時間・場所の共有の必要性の他、フィジカル空間では時期・時間帯によって空間の環境が変化しやすいという点が挙げられる。

4.3. 「居場所」の心理的機能に影響する要素

「居場所」の 4 つの心理的機能と対応する内容を抽出し、心理的機能に影響すると考えられる「居場所」の要素について、特にサイバー空間/フィジカル空間での違いに着目して考察した (表-10(d))。受容機能は、どちらの空間においても他者との関係性が重要な要素と考えられるが、他者との繋がり方やコミュニケーションには各空間での違いがあり、この機能に影響する関係性の質に異なる影響を与えると考えられる。刺激・活力機能は、自分の好きなことができる、他者との関わりの中で刺激が得られるといった点は共通だが、サイバー空間では、特に多様な人と繋がり、多

表-8 インタビュー調査概要

方法	オンライン個人インタビュー 約1時間 (半構造化インタビュー)
対象	アンケート調査回答者のうちインタビュー調査参加希望者から選定 (12名)
期間	2021年11月18日~12月5日
調査内容	アンケート調査で回答した「居場所」についての詳細な聞き取り <ul style="list-style-type: none"> 居心地が良く、安心感や満足感が得られると感じる理由 「居場所」の特徴 生活の中でどのようなタイミングで利用するか そこにいる相手と共有している他の場について、それらの場の使い分け等

表-9 インタビュー調査回答者

No.	性別	年代	職業	同居者
A	男	50代	自営業	1人暮らし
B	男	60代	その他の職業	1人暮らし
C	女	50代	会社勤務(一般社員)	親・兄弟姉妹
D	女	30代	公務員・教職員・非営利団体職員	1人暮らし
E	男	20代	会社勤務(一般社員)	配偶者
F	女	30代	会社勤務(一般社員)	配偶者・子供
G	男	30代	会社勤務(一般社員)	配偶者・子供
H	女	40代	会社勤務(一般社員)	配偶者
I	男	50代	会社勤務(管理職)	配偶者
J	女	40代	専業主婦	子供
K	男	40代	会社勤務(一般社員)	1人暮らし
L	男	50代	会社勤務(管理職)	配偶者

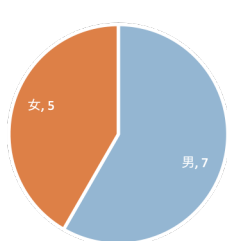


図-2 インタビュー回答者性別内訳

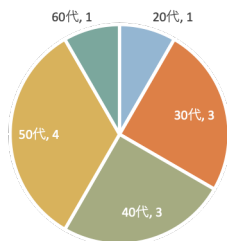


図-3 インタビュー回答者年代内訳

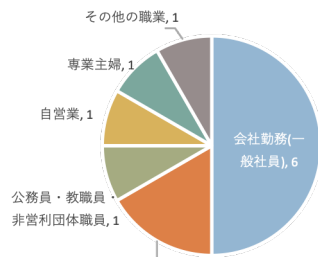


図-4 インタビュー回答者職業内訳

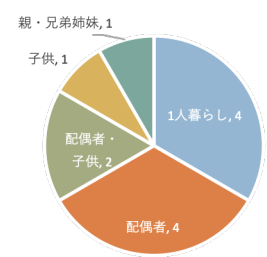


図-5 インタビュー回答者同居者内訳

表-10 ケーススタディ分析のまとめ

	サイバー空間	フィジカル空間	比較の視点
(a) 形成のきっかけ	オンラインツールの利用 共通性をもとにつながり他者との関係性が生じる フィジカル空間上で生じた関係性がサイバー空間上に発展	生活圏内の場所の利用 インターネット経由で場所を知る 社会的組織、地縁・血縁関係で他者との関係性が生じる サイバー空間上で生じた関係性がフィジカル空間上に発展	
(b) 場の役割・使い分け	サイバー空間上の場がフィジカル空間上の場の補完ツールとして用いられる “(LINEでは)直接会うのの補足とかが多いです。あくまで序章みたいなところしかLINEではせず、濃い話は直接会ってするかなと思います。”(L,自宅近くのカフェ) サイバー空間上の場の利用によって他者との関係性を維持 “直接会うのは、お互いのスケジュールが合わなかったり、コロナの問題とかで一緒に行動するのが制約されている中で、(中略)お互い繋がりあって安心感生まれるというか。その関係を継続させるという意味で会うだけじゃない重要さがあるのかなと思います。”(C,趣味のLINEグループ) フィジカル空間上の場の利用によって他者との関係性を強化 “Twitterだと会話のキャッチボールがあまりできないので、オフラインだとその場にいた人と時間を共有している中で会話ができるので、そのひとつとなりが話している中でよく分かってくる。”(I,Twitter) サイバー空間上の場をフィジカル空間上の場を場合・目的に応じて使い分け		<ul style="list-style-type: none"> アクセシビリティ 時間・場所の共有の必要性 コミュニケーション
(c) 時間・場所的利用の特徴	場所に縛られず都合の良いタイミングで利用する “相手のタイミングとか意識せずにコミュニケーションを取れる。”(中略)災害や天災があったり、ふとどうしているかなと思ったときにやり取りする。”(H,家族とのLINEグループ) 落ち着いた場所でまとまった時間で利用する “落ち着いて、特にたくさん話が進んでいる時とかは寝る前とかお風呂上がりとか30分くらい時間が取れる時にまとめて見ている。”(C,趣味のLINEグループ) 時間・場所の融通を利かせて利用する “わざわざ出かなくていいということで、みんな子供がいるときでもばつとつながりやすいので土日。”(G,知人とのZoom)	生活の中心的な場所ではほぼ毎日利用する 予め決まった日時・場所で利用する “毎月土曜の第3週の午後。(中略)1時間半くらいかかるところで電車で行っています。”(H,フルート教室) 気軽にアクセスし好きなタイミングで利用する “自分の息抜きができる時間があれば行きたい。(中略)近所なので、思い立ってすぐいける、自分のタイミングで行ける。”(F,マツサージ屋) 空間の環境に合わせた時期・時間に利用する “大体午後が一番暖かい時期。(中略)昼間の暖かい時に日に当たりにながら緑見ながら花見ながら噴水見ながらという条件が揃っている時。”(A,公園) 長期で遠くの場所を利用	<ul style="list-style-type: none"> アクセシビリティ 時間・場所の共有の必要性 空間の環境変化
(d) 心理的機能に影響する要素	受容機能 場所や社会的立場に関係なく共通性のもと繋がる インターネットを通じた間接的な繋がりが緩やかな繋がりができる 気軽なコミュニケーションの形	社会的組織、地縁・血縁関係のもと繋がる 偶発的に繋がりが生じる 密なコミュニケーション、経験の共有等	<ul style="list-style-type: none"> 他者との繋がりが方 コミュニケーション
	刺激・活力機能 多様な人と繋がる、多様な情報を得る	音や明るさ、温度、雰囲気などさまざまな体感的情報	<ul style="list-style-type: none"> 他者との繋がりが方 環境から得られる体感的情報
	自由・緊張緩和機能 匿名性が高く、コミュニケーションの制約があり関係性が深まりすぎない インターネット環境・ツールがあれば瞬時にアクセスが可能 限られた範囲内でのみやりとりできる 匿名的な利用で実世界から乖離できる 視覚的な情報から癒し、落ち着きを得る	料金、時間、対象の制約が少なく利用できる 物理的な仕切りがある、周囲との一定程度の距離を取れる 日常から離れた場所に行く 音や明るさ、温度、雰囲気等の体感的情報から癒し、落ち着きを得る 環境に対して愛着などの感情を持つ	<ul style="list-style-type: none"> コミュニケーション アクセシビリティ 周囲との壁のつくられ方 環境から得られる体感的情報 空間の環境とのインタラクション
	自己肯定機能 環境を自らの手で変えることができる	環境を自らの手で変えることができる	<ul style="list-style-type: none"> 空間の環境とのインタラクション

太字：回答者発言内容における根拠部分 () 内：発言者、「居場所」

様な情報を得られることがこの機能に影響すると考えられる。一方、フィジカル空間では、周りの環境から得られる体感的情報がこの機能に影響すると考えられる。自由・緊張緩和機能は、物理的に周囲との壁を作れること、周囲の環境からさまざまな体感的な情報が得られること、空間の環境に対しての愛着などがこの機能に影響すると推察され、フィジカル空間で優位といえる。ただし、サイバー空間でも、限られた範囲でのやりとりや、匿名的な利用等がこの機能に影響する可能性が考えられる。自己肯定機能は、他者との関係の中で役に立っていると感ずることや、環境を自らの手で変えられることがこの機能に影響すると考えられ、後者は、空間の環境とのインタラクションが可能なフィジカル空間でみられる要素といえる。

5. 結び

5.1. 結論

本研究では、サイバー空間およびフィジカル空間に形成される人々の「居場所」の様相をアンケート調査・インタビュー調査により明らかにした。ここでは、①「居場所」の

心理的側面、②生活の中での「居場所」のあり方、の2つの視点をもとに、本研究で得られた知見をまとめた上で、「居場所」におけるサイバー空間とフィジカル空間の違いについて考察を加える。

5.1.1. 「居場所」の心理的側面

アンケート調査の結果より、全体的にフィジカル空間上に「居場所」を保持している人に比べ、サイバー空間上に「居場所」を保持している人は少なかったが、サイバー空間上の空間・場も心理的側面を持つ「居場所」となっていることがわかった。また、「居場所」のタイプや空間・場によって、「居場所」の特性に違いがみられた。

「居場所」の心理的機能としては、受容機能、自由・緊張緩和機能、刺激・活力機能、自己肯定機能の4つが見出され、「居場所」タイプや空間・場の特徴によってこれらの心理的機能が異なることがわかった。受容機能および刺激・活力機能は、サイバー空間/フィジカル空間での大きな差はないが、それぞれで機能に影響する要素は異なっている可能性が示唆された。一方、自由・緊張緩和機能および自己肯定機能は、サイバー空間よりもフィジカル空間で高まる

傾向があり、身を置くフィジカル空間の環境から受ける影響や、環境とのインタラクションがこれらの機能に影響を与える要素として大きい意味を持つことが把握できた。

5.1.2. 生活の中での「居場所」のあり方

人々が生活の中でサイバー空間/フィジカル空間にどのように「居場所」を保持しているかは、属性や生活行動によって一定の傾向がみられ、それらは、一方の空間の利用や振る舞いのみで規定されるのではなく、もう一方の空間での「居場所」の形成や利用との関連があることが示唆された。また、人々は同じ他者との関係性のもとサイバー空間/フィジカル空間の双方の場を用い、それぞれの特性によって、使い分けしていることがわかった。

以上より、人々は、サイバー空間/フィジカル空間の相互補完的な関係の中で、双方を駆使して「居場所」を形成・利用し、心理的充足を得ているといえる。

5.1.3. サイバー空間とフィジカル空間の違い

サイバー空間とフィジカル空間の「居場所」の心理的側面や形成・利用のされ方等に違いをもたらす理由(表-10 比較の視点)として、①アクセシビリティ、②時間・場所の共有の必要性、③他者との繋がり方、④コミュニケーション、⑤周囲との壁のつくられ方、⑥環境から得られる体感的情報、⑦空間の環境変化、⑧空間の環境とのインタラクションの8つの視点が考察できた。今後の「居場所」を含む都市の生活環境の創出においては、人々の生活および「居場所」の形成がサイバー空間とフィジカル空間の相互補完的な関係の中で行われるという前提のもと、これらの視点を考慮して行われることが望ましい。

5.2. 本研究の課題と展望

本研究の課題としては、アンケート調査の負担感から実際より少なく「居場所」回答をしている人がいる可能性があること、「居場所」タイプによってサンプル数に偏りがあることが挙げられる。また、本研究の調査は、COVID-19の流行下で行われたものであり、特にフィジカル空間での人との交流のある場の利用が制限される等、人々の「居場所」の形成や利用にも影響していた可能性が考えられる。

今後の研究課題として、尺度項目を吟味し心理的機能を精緻化すること、サイバー空間/フィジカル空間での活動時間の視点を追加すること、同時に存在しうる2つの空間が「居場所」の心理的側面に与える影響を考慮することが挙げられる。

【補注】

- (1) 株式会社クロス・マーケティングに依頼した。
- (2) 予備調査は、筆者の SNS を通してウェブ調査への協力を呼びかけ、2021年6月4日～6月30日の期間で行った。46名から81の「オンライン上居場所と感ずる場や関係」について回答を得て、居場所と感ずる理由をKJ法により分析した。
- (3) 予備調査の分析の結果、「刺激や活力をもらえる」「程よい距離感である」「繋がっている」といった先行研究にみられなかった記述が得られた。

【参考文献】

- 1) Oldenburg R.(1989), 忠平美幸(訳) (2013), 「サードプレイス: コミュニティの核になる「とびきり居心地よい場所」, みすず書房
- 2) 日本建築学会(2019), 「まちの居場所: ささえる/まもる/そだてる/つなぐ」, 鹿島出版会
- 3) 富田英典(2016), 「ポスト・モバイル社会: セカンドオフラインの時代へ」, 世界思想社
- 4) 石本雄真(2010), 「こころの居場所としての個人的居場所と社会的居場所」, カウンセリング研究 43(1), 72-78.
- 5) 杉本希映・庄司一子(2006), 「『居場所』の心理的機能の構造とその発達の变化」, 教育心理学研究 54(3), 289-299.
- 6) 林田大作・舟橋 國男・木多 道宏 (2003), 「職場周囲に構築される『サードプレイス』に関する研究 神田地域・品川地域の比較分析」, 都市計画論文集 38, 433-438.
- 7) 山田崇史・中岡奈月(2020), 「働く女性の居場所に関する研究—都三県web アンケート調査に基づく類型化およびモデル分析」, 都市計画論文集 55(3), 1092-1099.
- 8) 木下誠一・矢部亮・今井正次(2008), 「居場所としての地域公共施設のあり方に関する研究」, 日本建築学会計画系論文集 73(628), 1205-1212.
- 9) 川村竜之介・谷口 綾子(2013), 「まちなかの居場所が生活の質・地域への意識に与える影響に関する研究」, 土木学会論文集 D3 (土木計画学), 69(5), 1-335-1 344.
- 10) 高谷邦彦(2019), 「サード・プレイスとしての Twitter —子育て主婦ユーザーの場合—」, 名古屋短期大学研究紀要 57, 1-13.
- 11) 藤野千種(2017), 「SNS を介したインターネット上での心理的居場所と well-being の関連」, 神戸大学発達・臨床心理学研究 16, 14-18.
- 12) 平井智尚(2017), 「インターネット利用の大衆化とオンライン・コミュニティの変容—『都市化』の観点からの考察」, 慶應義塾大学メディア・コミュニケーション研究所紀要, 67, 37-49
- 13) 石本雄真(2009), 「居場所概念の普及およびその研究と課題」, 神戸大学大学院人間発達環境学研究所研究紀要 3(1), 93-100.
- 14) 中藤信哉(2017), 「心理臨床と『居場所』」, 創元社
- 15) 住田正樹・南博文(2003), 「子どもたちの『居場所』と対人的世界の現在」, 九州大学出版会.
- 16) 西中華子(2014), 「児童期・青年期における居場所に関する一考察」, 神戸大学大学院人間発達環境学研究所 研究紀要 8(1), 151-164.
- 17) 総務省, 「令和2年版 情報通信白書」, <https://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/r02.html>, (最終閲覧 2022年4月23日)
- 18) 総務省, 「令和2年度情報通信メディアの利用時間と情報行動に関する調査報告書」, https://www.soumu.go.jp/main_content/000765258.pdf, (最終閲覧 2022年4月23日)
- 19) 原田克巳・滝脇裕哉(2014), 「居場所概念の再構成と居場所尺度の作成」, 金沢大学人間社会学域学校教育学類紀要 6, 119-134.
- 20) 岡本卓也・口田江里(2013), 「『居場所感』尺度の作成」, 感情心理学研究 21(Supplement), 37.